

伝道者の書9-12章 「御心にゆだねる知恵」

1A 労苦の楽しみ 9

1B 全ての人に起こる事 1-12

1C 死の定め 1-3

2C 生きているうちの楽しみ 4-10

3C 時と機会の支配 11-12

2B 敬われない知恵 13-18

2A 無駄になる知恵 10

1B 僅かな愚かさ 1-4

2B 権力の逆転 5-7

3B 注意を払う労働 8-11

4B 愚か者のお喋り 12-15

5B 怠ける王 16-20

3A 後に受ける報い 11

1B 勤勉な働き 1-6

2B 若者の痛み 7-10

4A 元に戻る結論 12

1B 老衰 1-8

2B 箴言のまとめ 9-14

本文

1A 労苦の楽しみ 9

伝道者の書9章です。9章は、8章 16 節からの続きなので、8 章 16 節から読んでみたいと思います。「8:16 私は一心に知恵を知り、昼も夜も眠らずに、地上で行なわれる人の仕事を見ようとしたとき、8:17 すべては神のみわざであることがわかった。人は日の下で行なわれるみわざを見きわめることはできない。人は労苦して捜し求めても、見いだすことはない。知恵ある者が知っていると思っても、見きわめることはできない。」

ソロモンは、神が正しい方であることを知っています。しかし、日の下で起こることだけを見ていれば、悪者も、正しい人も、その行ないにふさわしい報いを受けていないことに気づいています。そして何よりも、両者とも同じように死ぬ、その定めには変わりがないことに気づきました。それゆえ、自分が今、知恵を尽くして物事を探り出そうとしても、神のなされていることはそれを超えているということを話しています。神が何かをしていることは分かっていますが、それを悟ることはできない、というものです。

ですから私たちが心焦って、「これは、こうであるべきだ。ああであるべきだ。」と判断して、また拙速に動く傾向がありますが、分からないのだから主に任せよう、という姿勢が必要です。主がどこまで自分にしなさいと命じておられるのか、それを見極めることができるのは幸いです。そうでないものは、主に任せすることを知れば、ただ主を仰ぎ見て、その命令を一心に行なうことができますから、心に平安が来ます。わたしのくびきを負いなさい、わたしから学びなさいと言われたイエス様の言葉の通りです。それで続きになります。

1B 全ての人に起こる事 1-12

1C 死の定め 1-3

9:1 というのは、私はこのいっさいを心に留め、正しい人も、知恵のある者も、彼らの働きも、神の御手の中にあることを確かめたからである。彼らの前にあるすべてのものが愛であるか、憎しみであるか、人にはわからない。

人々がいろいろな働きをしていますが、そこから来る原動力、その心の情熱がどこから来ているのか、それが愛から来ているのか、憎しみなのか、分からないと言っています。愛憎の念という言葉がありますが、愛と憎しみは両者共存することもあり得ます。つまり、人の心のはかりごと、その動機は推し測ることはできないということです。人がどんなに物事について見極めたとしても、その奥にある心の動機までは知りつくすことができません。主のみが、心のはかりごとを裁くことのできる方です。「1コリント 4:5 ですから、あなたがたは、主が来られるまでは、何についても、先走ったさばきをしてはいけません。主は、やみの中に隠れた事も明らみに出し、心の中のはかりごととも明らかにされます。そのとき、神から各人に対する称賛が届くのです。」

9:2 すべての事はすべての人に同じように起こる。同じ結末が、正しい人にも、悪者にも、善人にも、きよい人にも、汚れた人にも、いけにえをささげる人にも、いけにえをささげない人にも来る。善人にも、罪人にも同様である。誓う者にも、誓うのを恐れる者にも同様である。9:3 同じ結末がすべての人に来るといふこと、これは日の下で行なわれるすべての事のうちで最も悪い。だから、人の子らの心は悪に満ち、生きている間、その心には狂気が満ち、それから後、死人のところに行く。

私たちの目で見ると、日の下で起こることには、物事を見るのに限界があります。確かに、正しい人にはそれなりの報いがあり、悪者にも同じです。しかし、正しい人にも悪者にも、同じように災いが下る時があります。交通事故であつたり、天災で死んでしまうこともあり、難病を患う家族もおり、本人が悪を行なったからそうなのではありません。そして良いことが、正しい人だけでなく悪者にも起こります。太陽の恵みというのは、イエス様が敵を愛しなさいと言われた時に、天の父がどちらにも照らして下さると言われたとおりです。そして何よりも、日の下においては、すべての人が死ぬ、という厳しい現実があります。正しい者が生き、悪者が死ぬというのがあるべき道理です。ところが、全く同じように死ぬという観察しか、日の下においてはできません。

しかしもちろん、ソロモンが見ていない視点は、もっと遡った人間の歴史です。正しい人は、一人もいないのです。人類の祖であるアダムが罪を犯したからです。それゆえ、地が呪われたものとなりました。その子孫は生まれながらにして罪を宿しています。ですから、正しい行いはすることができても、罪と死の原則が働いているこの世にいる限り、悪者が受けるような災いを、その正しい行いをしている人も受けなければいけません。そして、このように勧善懲悪がない、はっきりしないために、人の心には、「私たちが悪いことをしていても、何も起こらないではないか。」と言って、ますます悪いことをするようになります。また、自暴自棄にもなるでしょう。そして死を早めることさえあります。このことに、ソロモンは耐えられないようです、「これは日の下で行なわれるすべての事のうちに最も悪い」と言っています。

2C 生きているうちの楽しみ 4-10

9:4 すべて生きている者に連なっている者には希望がある。生きている犬は死んだ獅子にまさるからである。9:5 生きている者は自分が死ぬことを知っているが、死んだ者は何も知らない。彼らにはもはや何の報いもなく、彼らの呼び名も忘れられる。9:6 彼らの愛も憎しみも、ねたみもすでに消えうせ、日の下で行なわれるすべての事において、彼らには、もはや永遠に受ける分はない。

人は死んでいったら、何も残らなくなる。死んだら終わりだ、ということです。再び、ソロモンが日の下に起こることだけに注目していることを思い出してください。もし日の下に起こることだけを見つめていれば、全くその通りです。

先週のある学び会に、未信者の方が来られましたが、「人は死んだら終わり、ということだけははっきりしている。」というようなことを言われました。目で観察することだけ見たら、全くその通りですね。そこで、人類の歴史で唯一、その「全く」という観察を打ち破る出来事が起こった、というのが、私たちが信仰を持つことのできる根拠です。それは、歴史的にイエスが死者の中から甦られた、という事実です。多くの人が、「それは証明できないではないか？」と言いますが、いいえ、もちろん再現はできませんが、そんなことを言ったら、過去に起こったすべての事実が検証不可能になってしまいます。そうではありません、再現はできませんが、その事実を証言する人たちはいるのです。そして、その証言の確かさを検証することはできるのです。イエス様の復活は、自然科学における観察可能な証拠ではなく、法学における検証であります。

イエスが甦ったのだから、そこに永遠の命という希望があります。復活の希望があります。そして復活して、永遠の滅びを身に受けるか、永遠の命を相続するかの定めがあります。死後の命があるのです。これは、肉眼で観察することのできない領域ですが、イエスが復活されたということに基づき希望として信じることができます。

9:7 さあ、喜んであなたのパンを食べ、愉快にあなたのぶどう酒を飲め。神はすでにあなたの行ないを喜んでおられる。9:8 いつもあなたは白い着物を着、頭には油を絶やしてはならない。9:9

日の下であなたに与えられたむなしい一生の間に、あなたの愛する妻と生活を楽しむがよい。それが、生きている間に、日の下であなたがする労苦によるあなたの受ける分である。9:10 あなたの手もとにあるなすべきことはみな、自分の力でしなさい。あなたが行こうとしているよみには、働きも企ても知識も知恵もないからだ。

ここでソロモンが話しているのは、いわゆる快樂の溺れろということではありません。日毎の糧に感謝して、それを喜び楽しみなさい、ということです。そして、白い着物とありますが、これは暑い時になるべく涼くさせる服装です。それから妻と楽しめます。彼は他の箇所でも、妻以外の女たちについては、死よりも苦々しいということをお話していました。ですから、ごくごく普通の、日毎に与えられる楽しみを楽しみなさい、ということです。そしてそれ以外のことは、どんなに野心をもって動いても、主の御心でないものは決して成り立たない、という思想をソロモンは貫いています。

3C 時と機会の支配 11-12

9:11 私は再び、日の下を見たが、競走は足の早い人のものではなく、戦いは勇士のものではなく、またパンは知恵ある人のものではなく、また富は悟りのある人のものではなく、愛顧は知識のある人のものではないことがわかった。すべての人が時と機会に出会うからだ。9:12 しかも、人は自分の時を知らない。悪い網にかかった魚のように、わなにかかった鳥のように、人の子らもまた、わざわいの時が突然彼らを襲うと、それにかかってしまう。

ソロモンが伝道者の書で強調しているもう一つのことは、「時と機会」です。覚えていますか、3章において、「生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。植えるのに時があり、植えた物を引き抜くのに時がある。・・(3:2)」と、すべての営みにある時を、例を挙げて語っていました。そのために、自分の努力や才能によって、必ずしもその成果を手に入れることができるのではないのだ、ということです。そして、ある人には、例えば競走選手が怪我をして、再起不能になってしまうなど、不慮の事故も起こります。そのように、自分の時を知らない、ともソロモンは話します。

2B 敬われない知恵 13-18

9:13 私はまた、日の下で知恵についてこのようなことを見た。それは私にとって大きなことであった。9:14 わずかな人々が住む小さな町があった。そこに大王が攻めて来て、これを包囲し、これに対して大きなとりでを築いた。9:15 ところが、その町に、貧しいひとりの知恵ある者がいて、自分の知恵を用いてその町を解放した。しかし、だれもこの貧しい人を記憶しなかった。9:16 私は言う。「知恵は力にまさる。しかし貧しい者の知恵はさげすまれ、彼の言うことも聞かれない。」

ソロモンは知恵を探究する人でした。ですから、このような出来事が自分の人生に大きな衝撃を与えました。知恵というのは、人々に感謝されないということです。知恵によって、多くの良きものがもたらされ、権力者の前であっても、そこから自由にすることができるほどのものです。知恵のほうが、力よりまさるのです。ところが、彼が貧しいというだけで、さげすまれるというということです。

9:17 知恵ある者の静かなことばは、愚かな者の間の支配者の叫びよりは、よく聞かれる。9:18 知恵は武器にまさり、ひとりの罪人は多くの良いことを打ちこわす。

これは哀しきかな、現実ですね。知恵のある言葉があっても、たった一人の愚かなことが、これまで知恵によって築いてきた良きものを、一気に打ち壊すということです。これまで築いてきた平和が、一人の争いによって、台無しになってしまうことがあります。

2A 無駄になる知恵 10

1B 僅かな愚かさ 1-4

10:1 死んだはえは、調合した香油を臭くし、発酵させる。少しの愚かさは、知恵や栄誉よりも重い。

これは今、読んだ箇所続きを喩えて話しています。良き物全体が、少しの愚かさによって台無しになってしまうということです。一つの愚かな行為によって、例えば飲酒運転で人生を台無しにする。一つの姦淫によって、結婚、家族、また社会的地位を失う。いろいろありますね。

10:2 知恵ある者の心は右に向き、愚かな者の心は左に向く。10:3 愚か者が道を行くとき、思慮に欠けている。自分が愚かであることを、みなに知らせる。10:4 支配者があなたに向かって立腹しても、あなたはその場を離れてはならない。冷静は大きな罪を犯さないようにするから。

愚かな行為は、明らかにされてしまいます。自分は大したことがないと思っても、実は周りのみなに知られています。そして、そのことを戒め、あるいは裁く権威が任されている人の前に来た時に、逃げてはいけません。逃げるといことは、さらなる罰が待っているからです。裁きについては、それに服する姿勢が必要です。ダビデが罪を犯した時にこう言いました。「詩篇 51:4 私はあなたに、ただあなたに、罪を犯し、あなたの御目に悪であることを行ないました。それゆえ、あなたが宣告される時、あなたは正しく、さばかれるとき、あなたはきよくあられます。」

2B 権力の逆転 5-7

10:5 私は、日の下に一つの悪があるのを見た。それは権力者の犯す過失のようなものである。10:6 愚か者が非常に高い位につけられ、富む者が低い席に着けられている。10:7 私は奴隷たちが馬に乗り、君主たちが奴隷のように地を歩くのを見た。

5 節から、いろいろな愚かな行為についての箴言が始まります。その愚かな行為によって、全体が台無しになる、いくつかの例を挙げます。一つ目は権力者の犯す過失です。愚かな者が高い位に着くことです。位に着く人は富む人でなければいけないということです。ここでは、政治家や指導者と言う人が金持ちでなければいけないという話ではありません。かつては、王政であった時は、その王の持っている富がそのまま国の富でありました。指導者とその国の予算をはっきりと区別することができなかったのです。つまりここでは、「国の富をきちんと配分するのか、それとも貧困

な心で、それを私欲のために貪るのか。」ということです。

私たちは、きちんと霊的に非常に豊かな者にされていることを知らないといけません。キリストにあって富んだ者であります。愛において、その他の霊的祝福において恵まれており、富んでいます。ゆえに、他者に聖霊の賜物を分かち合うことができるのです。貧乏根性になって、他の人からもらうことばかり考えている、自分が富んだ神と交わり、その富を分かち合うのではなく、人からもらうことばかりを考えていることはあってはなりません。そして、そうしたキリストにある富を知らない人が、責任の伴う奉仕の務めについたり、指導的な働きはできないということです。そうすると、全体が大変な思いがします。

3B 注意を払う労働 8-11

10:8 穴を掘る者はそれに落ち込み、石垣をくずす者は蛇にかまれる。10:9 石を切り出す者は石で傷つき、木を割る者は木で危険にさらされる。10:10 もし斧が鈍くなったとき、その刃をとがないと、もっと力がいる。しかし知恵は人を成功させるのに益になる。10:11 もし蛇がまじないにかからずにかみつくなら、それは蛇使いに何の益にもならない。

これは、仕事をしている時に気をつけていないと、それによって傷を受けるという格言です。何かに取り組んでいる時に、その取り組んでいるものから害を受けることがあります。石を切り出しているのに、その石で傷ついてしまいます。そして、蛇使いのはずが、蛇に噛まれてしまいます。私たちは、ある人が問題を持っているとしてその問題に取り組んでいると、注意をしていないと、その問題を自分も抱え込んでしまうことがあります。

そして 10 節の格言は大切ですね。木がよく切れないと思って、一生懸命、なおのこと激しく斧を振り落すのですが、問題はその木の幹にあるのではなく、斧のほうにあったということです。私たちが、同じように何か問題に対処している時に、自分の持っているもの、つまり霊的知識であるとか、しっかり休んで、自分自身の主との関係を正すであるとか、そういったことを振り返るとよいと思います。

以前、とても面白い例話を聞きました。韓国人の牧師さんが、黙示録 2 章のエペソにある教会へのイエス様の言葉を解き明かしていたのですが、彼らは偽りの教えと戦っていました。しっかりやっているとイエス様はほめていましたが、「責めることがある、初めの愛から離れてしまった。」ということです。それで、彼は包丁を研ぐことの例えを使いました。包丁は一面だけ研いだら、使い物になりません。裏返して反対の面もとがないといけません。偽りの教えと戦うということは良いことですが、どうも人々が変わらない、一生懸命、その偽りの教えを正そうとしているうちに、愛から離れていた。そこを点検して、こんどは主の愛に戻るというもう一面のほうを研げばよいのですね。

4B 愚か者のお喋り 12-15

10:12 知恵ある者が口にするこばは優しく、愚かな者のくちびるはその身を滅ぼす。10:13 彼が口にするこばの始まりは、愚かなこと、彼の口の終わりは、みじめな狂気。10:14 愚か者はよくしゃべる。人はこれから起こることを知らない。これから後に起こることをだれが告げることができよう。10:15 愚かな者の労苦は、おのれを疲れさせる。彼は町に行く道さえ知らない。

愚か者の口についてです。これは、箴言の中で何度も出てきました。またヤコブの手紙では、私たちの舌は災いであり、小さな火でも大きな森を燃やすことができるという喩えを使いました。そして、ここで大事なものは「おしゃべり」です。伝道者の書では、全てのことは分からない。それは神の行なわれていることだから、あなたがたは神の前では「こばを少なくせよ(5:2)」とあります。

5B 怠ける王 16-20

10:16 わざわいなことよ。あなたの王が子どもであって、あなたの首長たちが朝から食事をする国は。10:17 幸いなことよ。あなたの王が貴族の出であって、あなたの首長たちが、酔うためではなく、力をつけるために、定まった時に、食事をする国は。

もう一つの格言は、怠ける王であります。「あなたの王が子どもであって」と言っていますが、これは子どものようにふるまっている、ということです。貴族の出というのは、王の任務についてよく分かっている人、ということです。食事をするのは、あくまでも自分たちの体を元気づけるためであれば、その食事が豪華に見えようとも、それは大きな問題ではありません。

10:18 なまけていると天井が落ち、手をこまねいていると雨漏りがする。10:19 食事をするのは笑うため。ぶどう酒は人生を楽しませる。金銭はすべての必要に応じる。

19 節は、鍵括弧を付けた方がよいかもしれません。この怠けている王が言っている言葉のことでしょう。食事をするときに笑い、ぶどう酒で楽しむというのは、ソロモンは否定していません。ずっとこれこそが、神の与えられた賜物だと言っています。問題はタイミングなのです。夕方に、王の任務を終えた後に、喜んで楽しんで食事をするのではなく、朝からこれから職務につかなければいけないのに、夕食と同じように食べるということの悪を話しています。

10:20 王をのろおうと、ひそかに思ってはならない。寝室でも富む者をのろってはならない。なぜなら、空の鳥がその声を持ち運び、翼のあるものがそのことを告げるからだ。

そのような愚かな王であっても、呪ってはいけないという戒めです。王がいれば、何かをしてやろう。けれども、そうした声というものは外に出ていくのだ、と言っています。王は、神から権威が与えられています。ゆえに、そのような小さなことも筒抜けになるということは起こり得ます。ましてや、神ご自身に対しては、私たちの小さな声はみな筒抜けです。

3A 後に受ける報い 11

1B 勤勉な働き 1-6

そして 11 章に入ります。怠けてはいけないことを教えたので、次に勤勉であることを教えます。

11:1 あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう。11:2 あなたの受ける分を七人か八人に分けておけ。地上でどんなわざわいが起こるかあなたは知らないのだから。11:3 雲が雨で満ちると、それは地上に降り注ぐ。木が南風や北風で倒されると、その木は倒れた場所にそのままにある。11:4 風を警戒している人は種を蒔かない。雲を見ている者は刈り入れをしない。11:5 あなたは妊婦の胎内の骨々のことと同様、風の道がどのようなものかを知らない。そのように、あなたはいつさいを行なわれる神のみわざを知らない。11:6 朝のうちにあなたの種を蒔け。夕方も手を放してはいけない。あなたは、あれか、これか、どこで成功するのか、知らないからだ。二つとも同じようにうまくいかもわからない。

ソロモンがここで強調しているのは、一つは、私たちはこの地上で起こっていることは見極めることはできないこと、だから、自分のしていること、主から命じられていることを理解していなくても、忠実に、熱心に行なっていることです。その結果は必ず残ることを、水の上のパンを始め、いろいろな喩えで教えています。私たちはどうしても、目に見える結果を求めます。目に見えないと、どうしてもそれをあきらめてしまいます。そしてもう一つは、主から命じられたことは、状況が良くないように見えても、やめないことです。雨が降ってきそうだ、風が吹いて来そうだと言って、あきらめる人が数多くいます。しかし、パウロは言いました。「2テモテ 4:2 みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。」

2B 若者の痛み 7-10

ソロモンは、自分の説教を終えようとしていきます。生きているうちは、何が起こるか分からないという、私たちは悟ることができないということを彼は強調してきましたが、はっきりしていること、悟ることができることがあります。「人はみな死ぬ。」ということです。ですから、生きていることに注目するのではなく、死ぬことに注目しなさいということを彼は話してきました。死ぬことに注目することによって、初めて生きることができます。そこでソロモンは、生きること、その活力に満ちた若者に対して、これまで行き抜いてきた老人である自分が遺す言葉を書いています。

11:7 光は快い。太陽を見ることは目のために良い。11:8 人は長年生きて、ずっと楽しむがよい。だが、やみの日も数多くあることを忘れてはならない。すべて起こることはみな、むなし。

今、生きている寿命の長さ、死んだ後の陰府にいる長さを比べています。生きている時に太陽の光を見ることができ、それは楽しむことができます。けれども忘れてはいけないのは、その後のほうがずっと長い年月なのだ、ということです。命は短いのです。死ぬのだから、今、自分を生き生きとさせている事柄も死に終わります。だから空しいとソロモンは言っています。しかし、

日の下だけでなく、死後に復活し、永遠の太陽を与えてくれる新天新地があるとしたらどうでしょうか？話は全く変わりますね、確かにすべての人は死にます。しかし、自分のいましていることを、天から来る都を仰ぎ見て行なっているのであれば、空しいのではなく、それこそが永遠の命であることを知るのです。

11:9 若い男よ。若いうちに楽しめ。若い日にあなたの心を喜ばせよ。あなたの心のおもむくまま、あなたの目の望むままに歩め。しかし、これらすべての事において、あなたは神のさばきを受けることを知っておけ。11:10 だから、あなたの心から悲しみを除き、あなたの肉体から痛みを取り去れ。若さも、青春も、むなしいからだ。

若さについて、その特徴をソロモンは言っています。楽しむこと、心を喜ばせること、おもむくまま歩むこと。自分の目に望むことをやっていくこと。これらは若さの特徴です。

先々週は、富士山麓で夏季キャンプに行ってきました。かつて小学生だった若者が今は、二十代の青年になっています。そして、相談を受けました。その時に自分が若かった時のことを思い出しながら話しました。信仰をもって、けれども、その教会の教団が聖書をきちんと信じていない神学校でした。私は、聖書を単純に信じることを覚え始めていたので、拒否反応が出ていました。けれども、教会の牧師さんは、「神学校で打ち叩かれることは良いことです。」と言いました。自分の信条に合わないことを聞いても、それでも耐えられる信仰として練られるという意味だったのでしょうか。確かに碎かれることは大切です。けれども、はたしてそうした人間的な方法で訓練を受けることはどうなのか？と果たして疑問でした。私はかねてから、クリスチャンになる前からもアメリカに留学に行きたいと思っていました。そして、それが正しい選択だったことを後で思いました。そして、主に拠って碎かれることも、主ご自身がしてくださいました。ですから、「自分の心に素直になって、いいと思う。」と言って助言したのです。

これが、心の望むままに歩むということだと思います。しかし、この時に考えなければいけないのは、「これらすべての事において、あなたは神のさばきを受ける」ということです。ソロモンは、死後の世界で裁きを受けるということは信じていたようです。実は、使徒パウロによると、ローマ 1 章において、異教徒であってもこのようなことを行なえば、死罪を受けることを知っているということを話しています。キリスト教について教えられなくても、誰もが自分の行なったことの報いを死後に受けるということは、薄々分かっているということです。そこで、若い人たちも、「自分の行動には、必ず神の前での申し開きがあるのだ。」ということは覚えておけ、ということであります。

そして 10 節では、若者に付き物の愚かさです。自分が若気の至りで行ったことが、大変な心や身体の痛みを残すこととなります。性的関係によって、中絶をしてしまった人。酒酔い運転で事故を起こして、致命的な怪我をした人。そして一生涯残っている心の傷。こうしたものと付き合っていくことをやってしまった、というのが若い時の思い出となり、ソロモンは空しいと言っています。

4A 元に戻る結論 12

1B 老衰 1-8

ですから、若い時に神を覚えなさいといけません。12章に入ります。

12:1 あなたの若い日に、あなたの創造者を覚えよ。わざわいの日が来ないうちに、また「何の喜びもない。」と言う年月が近づく前に。

ソロモンが初めて、「神」以外の呼び名で神を呼んでいる箇所です。創造者と呼んでいます。なぜか、それは命を造られた主権者ということです。自分の命を支配している方がおられる、その方を覚えなさいと言っています。私もこの恵みにあずりました。1988年の年末、初めて祈りという祈りを捧げました。それまでは、てるてる坊主であったり、大晦日で、お寺で自分の心に語ってみたりしましたが、こう祈りました。「生まれてからこの方、あなたを無視してきたことをお赦してください。」つまり、命を造られた方なのに、その方を無視していたということを告白したのです。すると、頭のとっぺんから足のつま先まで、神がこの惨めな自分を受け入れておられる、愛しておられるのを感じたのです。

そして、「災いの日」というのは、愚かなこととして自分の身に災いをもたらすということです。それから、「何の喜びもない。」と言う年月」というのは、神を知らずに年老いていく年月ということです。神を知らないで生きれば、どうなるのか？若い頃にもっていた喜びというものは、全て過ぎ去っています。何の喜びもなくなるのです。次に、老衰して死んでいく過程をソロモンは語ります。

12:2 太陽と光、月と星が暗くなり、雨の後にまた雨雲がおおう前に。12:3 その日には、家を守る者は震え、力のある男たちは身をかがめ、粉ひき女たちは少なくなって仕事をやめ、窓からながめている女の目は暗くなる。12:4 通りのとびらは閉ざされ、臼をひく音も低くなり、人は鳥の声に起き上がり、歌を歌う娘たちはみなうなだれる。12:5 彼らはまた高い所を恐れ、道でおびえる。アーモンドの花は咲き、いなごはのろのろ歩き、ふうちょうぼくは花を開く。だが、人は永遠の家へと歩いて行き、嘆く者たちが通りを歩き回る。12:6 こうしてついに、銀のひもは切れ、金の器は打ち砕かれ、水がめは泉のかたわらで砕かれ、滑車が井戸のそばでこわされる。

ここまで老衰とその死を詩的に表現しているところはないと思います。老衰していく世界を、太陽が出ているのに、これから雨雲がおおっていくことに喩えています。一つは体力の低下です。これまでは動いていた家を守っている男の力は衰え、女も同じように家事の力がなくなります。そして女の目が窓から外を向いていましたが、それさえもなくなり家の中で目がうつろになります。それから、肉体の感覚が衰えます。「通りの扉」とありますが、これが外界からの刺激に反応する感覚のことですが、それが閉ざされます。それで聴覚が鈍り、声も出てこなくなります。それから5節、高い所を恐れて怯えるのは、背を曲げて歩いていることを暗に喩えています。そして、アーモンドの花は白ですが、白髪になるということでしょう。そして、いなごは元々、あの足で力をもって飛び

跳ねるのに、のろのろしか歩くことができない、力を失っている姿です。

それから、「ふうちょうぼく」とあります。これはエルサレムの壁や、地中海沿岸の崖に生える低木のことです。その蕾を酢漬けにして食用にできます。けれども花を咲かせてしまいました。つまり、これは日本語の表現にある「臺(とう)が立つ」と似ています。食用に適さなくなってしまった、ということで、性欲が減退してしまったことの暗示だという説明が注釈書にありました。口語訳では「欲望が衰える」と訳されます。来週から学ぶ、雅歌ですが、このような隠喩表現が数多く出てきます。そして死に絶えます、永遠の家へと嘆く者たちが歩くというのは、葬儀をしている風景です。そして、照明器具として使っていた金の器が、天井から銀の紐で吊っていたところ切れて、地面に落ちて砕かれてしまいました。目を閉じて、一切、外からの光が入って来なくなったということです。そして水がめが壊され、井戸の滑車が壊されるというのは、命の水が一切出てなくなった意味です。

12:7 ちりはもとあつた地に帰り、霊はこれを下さつた神に帰る。12:8 空の空。伝道者は言う。すべては空。

このようにして、ソロモンは死を定義しました。創世記の神、アダムを造られた神を思い出しているのだと思います。塵から人の体を作り、その鼻に主ご自身の息を吹き込み、それで霊ある者となりました。死ぬことは、肉体がその塵に帰ることです。それから霊は、神に帰ることです。ここの箇所は、私たちの死生観が神の領域であることを教えています。肉体については、葬り土に帰ることについては日本人の人たちはもちろん知っていますが、命を造られた方のところに霊が帰ることについては信じていません。創造主を信じていませんから、その出所を知りませんから、そこら辺にまだ存在していると思っているのです。それで死後の供養、また盆踊りなどが行われます。しかし、私たちは霊は神のところに帰るので、それは神の領域であり、死者の霊と交流するあらゆる行為は、聖書では厳に禁じられています。

そしてソロモンは、初めに言った言葉をもって結論を話します。「空の空。伝道者は言う。すべては空。」です。神が命を与え、そして神が命を取られます。神の主権あってこそその人の命であり、神から離れたところにある人の営みは、空しさと苛立たしさだけが残ります。

2B 箴言のまとめ 9-14

そして、伝道者の書をまとめた経緯について書いています。

12:10 伝道者は適切なことばを見いだそうとし、真理のことばを正しく書き残した。12:11 知恵ある者のことばは突き棒のようなもの、編集されたものはよく打ちつけられた釘のようなものである。これらはひとりの羊飼いによって与えられた。12:12 わが子よ。これ以外のことにも注意せよ。多くの本を作ることには、限りがない。多くのものに熱中すると、からだが疲れる。

ソロモンは、自分が真理の言葉を書き残し、それは突き棒のように人を突き、前に進ませる知恵がある、また人に安定をもたらすものであり、そしてこれが「ひとりの羊飼ひ」つまり、主ご自身からのものであることを教えています。これは確かに箴言であり、かつ神の靈感を受けているのです。

そして 12 節は大切ですね、いろいろな他の本があります。それに注意せよと彼は言っていますが、神からきた書物でなければ、それを多く読むことは体に疲れをもたらします。これは実感できますね、聖書の言葉だけが私たちに、魂の飲み物のように生かしてくれますが、その他の書物は疲れをもたらします。その理由が次にあります。

12:13 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。12:14 神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。

これが結論です。ソロモンは、神から離れて知恵を求めようとしたが、その探究によって知ったのは、初めから聞かされていたことです。「神を恐れよ。神の命令を守れ。」であります。主との関係の中にしか、しかも、それを命令として受け入れていくことにしか、命がないのです。私たちはいろいろな理屈を付けますが、そんなことは、必要はないし、理由を付けてはいけません。命令というのは、条件を付けないからこそ命令なのです。もし理由を付けるなら、そこに人が悟りたいという欲望が出ており、その欲望こそが人を空しくさせる、絶望させることをソロモンはこれまで説いてきました。イエス様は言われました、「わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています。(ヨハネ 12:50)」

そして、私たち人間は全てが、責任ある存在として造られています。ソロモンは、「神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。」と言いました。この地上で、肉体のある時に行っているその一つ一つが、結果がある、報いがあるということを知っているからこそ、私たち人間が人間として生きることができます。地獄ということは、恐ろしいものであり、私たちはあまり語りたくないと思います。けれども、死後に神の裁きがあるということは、今の命に責任を持つこと、そしてそれによって初めて私たちが生きていることの意味を見出すことができるのです。さばきがないから、人は糸が切れた凧のようになってしまい、何をすればよいか分かりません。私たちは、主の前で生きているのだ。主に対して生きているのだ。主から言われたことを行なうように造られているのだ。自分のできること、したいことをするのはないのだ。このことを知りさえすれば、私たちの魂に安らぎが与えられ、満足が与えられるでしょう。